銅　賞

見えない壁

横須賀市立坂本中学校三年　　田　中　琴　乃

私たちは普段生活しているだけで、たくさんの人々を見ます。例えば眼鏡をかけている人、身長の低い人、優しい顔をした人など個性あふれた人々と共にくらしています。私は個性あふれた人々を見ると「この人と話すと楽しくなるだろう」、「この人は自分よりいろいろな事を知っているだろう」と顔を見るだけでさまざまな想像をします。しかし、障害を持つ人を見るとどうしても「かわいそう」、「こわい」とマイナスな気持ちになってしまいます。なので学校へ行く途中も障害を持つ人を見ると普通の人とは違いにらんでしまったりすぐに顔をそらしてしまいます。学校生活の中でもクラスが一緒だった第一教室の生徒ともあまり会話をしないようにさけていました。

そのような気持ちをもつなか、二年生の時に音楽の授業で第一教室の生徒の子とリコーダーのテストでペアを組むことになりました。私は楽譜を読むことができ、リコーダーも得意であったため、楽譜は読めずリコーダーを上手にふけない彼女はなまりのように重い荷

物だと感じました。だから、ついきつい事を言ってしまったりひどい事をしてしまい、テストをあきらめていた私と彼女の間には気づいたら「見えない壁」が作られていたのです。そして、冬休みが明けてついにきたリコーダーのテストです。授業のはじめに与えられた練習時間を使い、いつものように音の合わない曲を今日もするのかと彼女と一緒に練習をしていると彼女は予想外の演奏をしました。それはタンギングや指づかい、音の拍まで全てカンペキでした。驚きをかくせない私は彼女に「どうしてそんなに上手になったの。」と問うと、満面の笑みをうかべて「毎日毎日、一生懸命リコーダーをふいて練習して、がんばったからだよ。」と返答しました。私はまた驚きました。彼女が毎日リコーダーを練習していた事。リコーダーに一生懸命になっていた事。なにより、ひまわりのようにあんなにまぶしい笑顔になる事。私の知らない彼女を見て「絶対にこの努力は無駄にしてはいけないんだ。」と思い、おたがいに今までで一番最高の演奏をしようと約束し、テストにいどみました。演奏中はおたがいの心がひとつとなりいきピッタリで、先生にもほめられました。そして、気づかないうちに「見えない壁」もなくなっていました。

今回のこの体験をとおして障害を持つ人だって私たちと「同じ」

ということを彼女に教えてもらいました。例えばがんばりたいことに一生懸命になったり、努力したりと結局はみんな人間だから同じなのです。また、「障害」という言い方は彼女たちが好きでなっているわけではないので、「個性」という表記でいいと思います。私はもともとは彼女たちの姿を見てかわいそう、こわいなど勝手に悲劇のヒロインのように思っていました。しかしちがいました。少し苦手なことが多いだけで私たちと何の変わりもなく、楽しいときは笑って悲しいときは泣く。私たちと比べて何かおかしいところがあるのでしょうか。

まだ、学校に行くとき彼女と同じ「個性の強い人」を見ると抵抗はありますが、少しずつ距離をつめていきたいと思います。